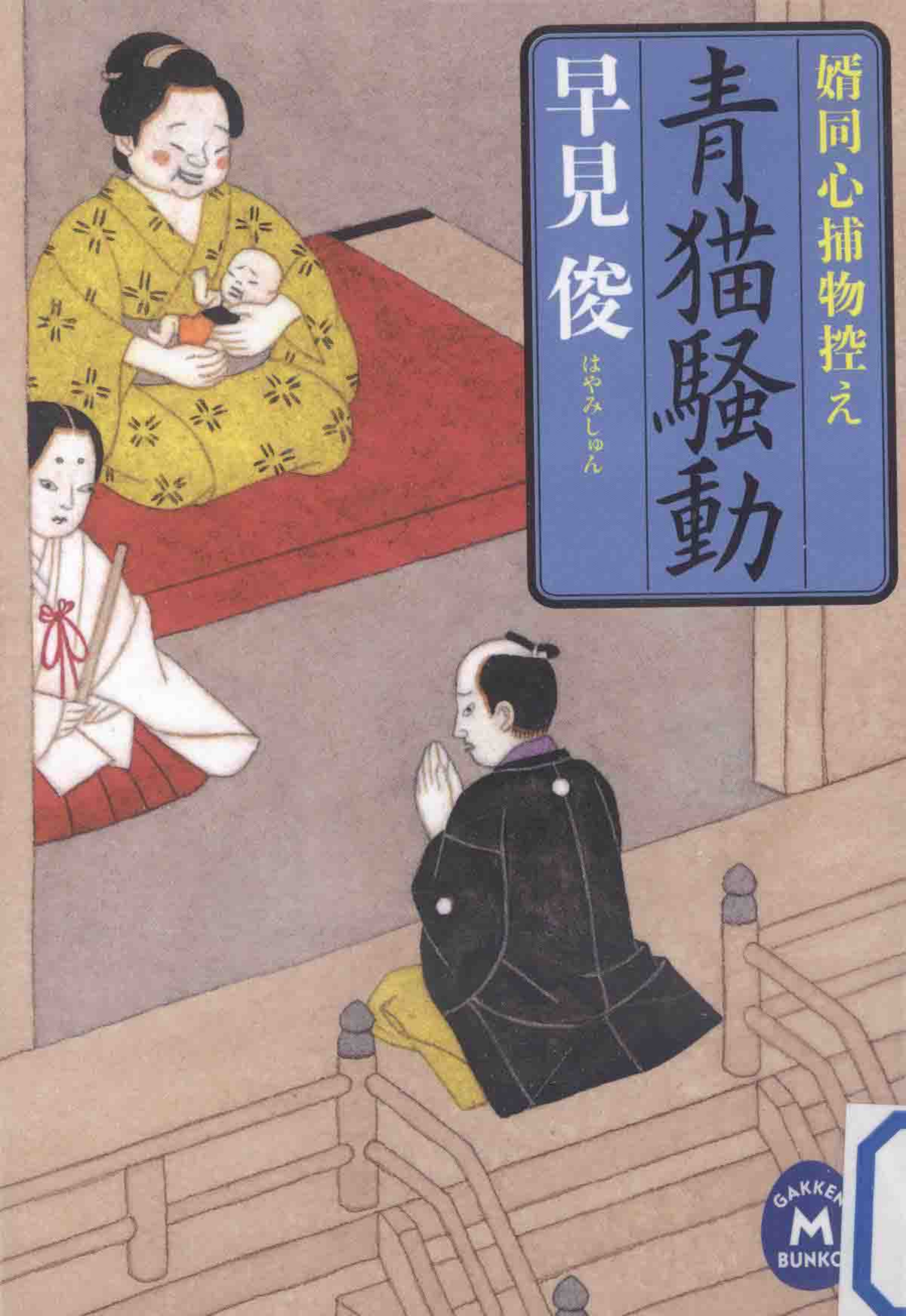
婿同心捕物控え
青猫騒動
早見 俊
はやみしゅん
GAKKEN
M
BUNKO

同心捕物控え

青猫騒動

常州大学图书馆藏书章

早見俊

学研M文庫

婿同心捕物控え　青猫騒動

早見 俊

学研M文庫

2012年12月25日　初版発行

発行人――――脇谷典利

発行所――――株式会社　学研パブリッシング

〒141-8412　東京都品川区西五反田2-11-8

発売元――――株式会社　学研マーケティング

〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本 ―中央精版印刷株式会社

© Shun Hayami 2012 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは――編集部直通　Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは――
販売部直通　Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418　東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター『婿同心捕物控え』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。
Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター　TEL 03-3401-2382

http://www.jrrc.or.jp　E-mail：jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉

は-11-7

目次

第一章　青猫とお吉　5
第二章　差配違いの御用　50
第三章　困った叔父　99
第四章　富くじ　143
第五章　捕物の指揮　183
第六章　怪我の功名　222

同心捕物控え

青猫騒動

早見 俊

学研M文庫

www.ertongbook.com

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

目次

第一章　青猫とお吉　5
第二章　差配違いの御用　50
第三章　困った叔父　99
第四章　富くじ　143
第五章　捕物の指揮　183
第六章　怪我の功名　222

第一章　青猫とお吉

一

文政(ぶんせい)十年（一八二七）長月(ながつき)（九月）十日。

このところ、火付盗賊改(ひつけとうぞくあらため)を悩ます連続放火事件が発生していた。一月(ひとつき)で五件の付け火があったのだ。日本橋界隈で二件、神田で一件、浅草で一件、上野で一件である。幸いというよりは、奇妙といった方がいいか、いずれも小火(ぼや)程度で収まり、大火には至っていない。

そして、決まって、小火の焼け跡には青猫という名前と猫が描かれた書付が残されていた。人々はこれらの付け火を単なる小火とは受け止めず、来るべき大火の前兆として捉(とら)えていた。誰言うともなく、江戸っ子が二人顔を合わせれば、江戸中が火の海になると噂(うわさ)し合う程だ。

当然、火付盗賊改方においても青猫のことは話題となり、いや、話題になる

どころか、捕縛することが急務となった。
今夕も青猫について、四谷仲町にある火付盗賊改方頭取山際仙十郎の組屋敷の大広間で活発な論議が繰り広げられた。
与力望月宗太郎が中心となり、
「青猫なる賊、断じて許すことできん。禍が大きくなる前に捕えることが肝要じゃ」
「こうなったら、夜廻りを強化せねばなりませんぞ」
同心西村寛太郎が強く主張した。
「それは、既に行っておる。南北町奉行所においては、各町の町役人に通達を出し、火の廻りを強化しておる」
望月の物言いは西村の誇りを傷つけるものだった。
「ですから、町方なんぞ頼りにならんのです。我らの手で行ってこそ、青猫の捕縛もできるというものでござる」
西村はむきになった。
望月は鼻白んだ顔でそれを受け流すと、
「町役人に火の廻り徹底させることが近道だ。我らとは数が違う。我らは町方

から寄せられた情報と町方の差配違いの所、例えば寺や神社を中心に探索を行う。青猫、単独犯ではあるまい。必ずや一味が巣食うねぐらがあるはずだ。寺や神社というのはうってつけだからな」

西村は黙り込む。いかにも不服そうだ。

「よいか、功名心にはやることなく、怪しげな連中を見かけたという話があれば、包み隠すことなく、報告するのだ。よいな」

望月は強調した。

「承知！」

同心たちは結束の固さを示すように声を揃えた。

「ならば、解散」

望月が言うとみな、一斉に大広間から出て行った。

その中の一人、桐生直次郎は商家の出身である。色が白くひょろりとした長身で目鼻立ちが整った利発そうな面差しだが、近寄りがたくはない。やさしそうな目元、笑みを絶やさない口元は火盗改という役目には不似合いなほど親しみを抱かせる。腰に大小を帯びていなければ、大店の若旦那といった風貌だ。

この直次郎、日本橋松川町に店を構える両替商布袋屋の次男坊に生まれた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

父幸右衛門は一代にして布袋屋を築き、自分の成功の証に直次郎を武士にしたいと考えた。折から火盗改の同心を務める桐生家で婿養子の話が持ち上がっていることを聞きつけ、莫大な持参金を用意して直次郎の養子縁組を整えたのである。

その直次郎の兄、幸太郎は町奉行所の触れに従って火の廻りをしている。近所の自身番に詰め、二手に分かれて火の廻りをすることになった。

「では、我らがお先に」

幸太郎は先に夜廻りに出た連中を見送った。

腰高障子を震わす夜風は昼間とは違って涼しい。それでも、夜廻りとなると億劫になるものだ。

「いやあ、とんだことになったものですな」

幸太郎の向かいに座った初老の男が言った。

「まったく、人騒がせな連中ですよ、ねえ、三州屋さん」

隣の男がそれを受ける。

「同じ猫でもうちのミケなんかは、おとなしいものですけどね」

三州屋と呼ばれた男は言う。たちまち、賛同の声が上がった。みな、ひとしきり笑い終えてから、

「しかし、火の廻りをしていないとなると、いささか暇ですな」

幸太郎が言った。

「そうですな。その上、他にやることもなし、まさか、酒を酌(く)み交わすわけにはいきませんからな。こうして茶でも飲んで世間話するくらいしかありません」

三州屋が言うと、

「ならば、暇潰しといってはなんですが、ここで、わたしの拙(つたな)い芸でもお聞かせ致しましょうか」

幸太郎は得意げに言った。

四人の男たちの顔つきが一瞬にして変わった。何か、踏んではならないものを踏んでしまったような、そんな怖れを抱いている様子である。

「いや、布袋屋さん、それでは気の毒ですよ」

「そんなことありませんよ、義太夫(ぎだゆう)の一節(ひとふし)でも」

「いえ、そういうわけではないのです」

「なら、いいじゃありませんか、ほんのさわりを軽くやるだけなんですから。こんなところで、芸惜しみするつもりはございません」
幸太郎は語る気満々である。
「でもねえ」
三州屋を始め、みな、恐怖に身をすくませた。
「みなさん、遠慮はご無用です」
幸太郎はこほんと空咳を一つするとおもむろに背筋を伸ばした。みな、面を伏せ絶望的な面構えで恐怖の瞬間を待ち構えた。幸太郎は興奮のためか顔を上気させて、
「これみたまえ光秀殿」
と、太功記十段目、いわゆる、「太十」の一節を唸った。
みな、面を深くした。みなの迷惑顔など幸太郎の眼中にはない。自分の世界に入り、ひたすらに得意のネタを語り出す。
番小屋は幸太郎の義太夫が渦巻き、恐るべき空間と成り果ててしまった。幸福の絶頂にある幸太郎に対して、三州屋たちは塗炭の苦しみである。
「ああ、たまらない」

「く、苦しい」
幸太郎の手前遠慮していた三州屋たちもさすがに我慢の限界を超え、異様な苦しみにのたうちまわる羽目に陥った。
・幸太郎の目を吊り上げ、肩を怒らせて我を忘れて語る姿は、まさしく鬼気迫るものがある。
ところが、三州屋はついには耐え切れず、
「勘弁してください」
と、勢いよく立ち上がった。
幸太郎はもの凄い形相で睨む。他の三人もそれを潮に逃げ出そうとした。
幸太郎は語ったまま四人を睨んだ。四人は土間に降り立つ。すると、幸太郎は義太夫を語りながらそれを追いかける。
三州屋は腰高障子に掛けた心張棒を外し、開けようとした。と、同時に腰高障子が開いた。危うく鉢合わせしそうになったのは、八丁堀同心である。
南町奉行所定町廻り同心向井庄之助だ。庄之助は手先として使っている岡っ引の亀の湯の文治を連れ、中に入って来た。
さすがに幸太郎も義太夫を止めた。庄之助は顔を歪ませている。幸太郎は丁

寧に腰を折り、
「これは、向井さま、お疲れさまでございます。夜廻りでございますか」
「そうだが、近所が騒ぎ出しおってな」
庄之助は何故か苦笑を浮かべた。
「ひょっとして、青猫が出没したのでございますか」
「いや、そうではない」
「では、どんなことでございましょう」
「苦情だ。番小屋から獣の叫び声が聞こえるから見てきて欲しいという」
庄之助の物言いに三州屋たちは忍び笑いを漏らした。ところが、苦情と不安の原因たる当の幸太郎はというときょとんとなっている。
「この番小屋からですか」
まるでわかっていない。
「そうだ」
向井は目を尖らせた。
「はて、どうしたことでございましょう」
「まあ、それはよい。原因はとにかく、よくわかった」

「どうしたことだったのでございましょう」
「いや、ともかく、大人（おとな）しく番をしておれ」
庄之助の言葉に三州屋たちは大きくうなずいた。得心（とくしん）がいかない様子の幸太郎を横目に文治が言った。
「茶でも淹（い）れてくだせえよ」
「これは気がつきませんで」
三州屋はそそくさと湯呑を用意した。庄之助たちは座敷に上がった。温かい茶を庄之助は手に取る。三州屋たちは火の廻りに出かけてくると言ってそそくさと逃げるようにして出て行った。
「それにしましても、その獣のような叫び声とはなんでございましょうな」
幸太郎はまだ得心がいかないようだ。庄之助と文治は苦笑を漏らし顔を見合わせた。
「ところで、青猫一味、何かわかりましたか」
幸太郎は真顔になった。
「それが、どうもな」
庄之助は苦面を作った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com